

二〇二一年三月一五日(参加者一八名)

草萌ゆる大地を蹴って太極拳	有香
遠足の子とおしゃべりす吟行子	"
文塚にまだ新しき落椿	"
汲み上ぐる釣瓶に春の水あふれ	"
鳶の輪の下にひねもす耕せり	"
大川の渡し再開水温む	よし子
俎の刻む手をとめ初音聞く	"
避難所の祝卒業の字の虚し	"
いかなこのくぎ煮伝授す漁師街	きづな
春の月仰ぎ被災地思ひけり	"
とりどりの漁網干されし浜うらら	"
臥竜なす松の緑や美術館	菜々
花ミモザ災後十年の町並に	"
翼張る神話の女神風光る	"
下萌のベンチは全て海へ向く	かれん
剪定の男は寡黙高梯子	"
遠景の山笑ふなり鳴尾光る	"
轉りや自転車の子はイヤホン	つくし

春障子腓返りの足崩す	"
母の忌に母直伝の蓬餅	うつぎ
くつきりと灘の潮目や花菜畑	"
春憂ふどころではなし地震巨大	宏虎
楔場に高鳴る春の水の音	ひかり
人丸の丘へ椿の藪の道	わかば
春陽ざしへと直立す亀の首	こすもす
草青む近江平野の長き畝	小袖
春光の大河を分つ舳先かな	せいじ
玉の日に合掌ゆるぶ牡丹の芽	満天
海光に黄をあふれしめ花ミモザ	はく子
土佐伊予と水木浅黄を広げけり	"

定例会の選

二〇二一年三月一五日(参加者一八名)